
異世界の退魔師

円香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界の退魔師

【Nコード】

N7515L

【作者名】

円香

【あらすじ】

表の顔は、売れない小説家。裏の顔は、凄腕の退魔師。草薙翡翠、33歳。ある裏の仕事で寂れた廃村に祀られていた祠を調べてほしいという依頼があり行く事になった。その廃村には、ある伝説が伝えられていた。翡翠は、気が付くと見知らぬ森の中にいた。まさか、この歳で異世界トリップ？おまけに15歳以上も若返りをしているし（若返るのは嬉しいけどトリップはいらない）。翡翠は、元の世界に帰るために旅に出る。そこで、多くの人たちと出会い触れ合う事でこの世界の事を知る。

プロローグ（前書き）

今回が、初投稿です。その為、誤字・脱字があると思いますが御容赦下さい。また、文字の言葉使いに古い言い回しを使う事があります、御手数ですが読者自身で御調べ下さい。その他に、文中に残酷な描写等があり読む時に御注意下さい。そして最後に、読者自身の趣味・嗜好及び考えに合わない場合は読む事をお止めする事をおすすめします。

プロローグ

ここに、表の顔は、売れない小説家。裏の顔は、凄腕の退魔師である草薙翡翠^{クサナギヒスイ}33歳がいる。今彼女が訪れているのは、ある県の廃村で昔から付き合っている同業者からの依頼の仕事でそこに祭られている祠の周辺で奇怪なことが起きているから調べてきてほしいということである。その廃村には、ある伝説が伝えられていてそれによると世界を超えることができ、またその世界に必要な人物を送るといわれている。

その為か廃村になる前から、神隠しという現象が起きており、度々退魔師の所に依頼がきていた。そのつど、調べてはいるのだが何も起こらないうえ退魔師でも分からないときている。今回は、その祠を定期的に調査・封印をする事が仕事なのだが、その事を代々してきた退魔師の家系が途絶えてしまい草薙家現当主である翡翠のところに依頼がきたのである。草薙家は、裏では有名な退魔師の家で翡翠はその中でも飛び抜けて力の強い術者でもある。今現在では翡翠しか草薙家の力を受け継ぐ者はなく、また彼女以外の者は退魔師から退いている為にその事は知られてはいないのが現状である。

ただ今、廃村の外れ祠周辺の調査が終わり後は封印をして終わりという時

「まったく、私に頼むな。私だってこれでも年頃の女のに。こんな寂れた廃村に一人で来させるなんて。」と、文句を言いながら封印の準備をしていた翡翠が何かに気が付いた様子で辺りを見渡すと祠の扉の隙間から微かに光が漏れ出しているのが見えた。それを確かめるために扉を開けて、中の御神体である水晶玉に触れた時それは起きた。辺り一面に目も眩む光があふれその中から声が聞こえてきた。

「古の約束に従い、汝をアースガルドに送る。そこで汝がなすべき事を行い終りし時に地球に帰還する為の扉が開かれる。ただ、地

球に帰還するかどうかは汝しだい。そして、帰還の為の扉は一度しか開かれない。心して考えよ。それから、オプションとされている付けておくので宜しく。頑張れよ、翡翠。」と、前半は威厳のある声で後半はふざけた様な声が聞こえてきた。それを聞いた翡翠は、「ふざけるな！。もう少し、詳しい説明をしてからにしてよ。それにオプションで何！」と、叫びながらその光の中に消えていった。そして、その光がおさまると辺りは何もなかったかの様にしんと静まり返り祠の周りには封印をしたとおもわれる跡があるばかりである。

プロローグ（後書き）

今回、初めての投稿です。いろいろあると思いますが、これからも宜しく願います。

出会いとこれからの事（前書き）

投稿遅くなりました。読みやすい様に見ました。

出会いとこれからの事

ここは、異世界アースガルド。アースガルドは、三大陸からなり後は大小様々な島があり周りを海に囲まれた世界である。その中でも大きな大陸でもあるアース大陸には、五つの王国と二つの小国からなる大陸でガルド王国が主な話の舞台となる。

そして、ガルド王国の王都オスニアから徒歩で半日ほどに行ったところにある迷いの森と呼ばれているルプルの森の奥に一つの丸太小屋がある。そこには、かつてアース大陸一の魔術師と呼ばれていた人物が隠遁生活を送っている。彼の名は、ホロイド・コルティリア90歳である。

彼ホロイドは、今森の中で薬草を摘んでいる。ホロイドは、抱えている籠が一杯になると腰を上げ体を伸ばした。

「やれやれ、この年になると薬草摘みも楽ではないの。わしも、年をとったという事かの。帰ったら、温かいお茶を入れよう。」

ホロイドは、丸太小屋に帰るためにその場を立ち去った。そこから歩いて、しばらくすると自分の丸太小屋が見えてきた。あと少しで、丸太小屋に辿り着けるという時にホロイドの使い魔である梟のバーニングが彼の肩に飛び下りてきた。その慌てた様子にホロイドは、バーニングに問いかけた。

「どうしたんじゃ？。そんなに慌てて。精霊樹に、何かあったのか？。ん？バーニング。」

そうホロイドが聞くと、バーニングは精霊樹の方をしきりと見

つめていて様子がおかしかった。その為ホロイドは、精霊樹のある場所に様子を見に行くために籠をその場におき使い魔のバーニングに見張りを頼むとその場を後にした。

しばらくすると、精霊樹が見えてきてその傍に幼い子供が蹲っていた。その子供こそ、クサナギヒスイ草薙翡翠である。

「どうしたんじゃ？こんな森の奥に。森で遊んでいて、迷ったのならミル村まで送ろう。」

そうホロイドが、声をかけた。度々、この様な事が起こっているのだ。ルプルの森のすぐ傍に、ミル村という小さな村がありそこの子供達が迷いの森と呼ばれているここを遊び場にしていて、時折りホロイドの丸太小屋の辺りまで迷い込んで来る子供がいたからである。

ただ、精霊樹がある場所はそれよりも更に奥なので不思議に感じた。ホロイドが、もう一度声をかけようとしてその子供に近寄ったその時、不意に子供が顔を上げてホロイドを見上げてきた。それを見て、ホロイドは驚愕した。その子供は、年の頃10〜12歳位の少女でこの世界では珍しい黒髪黒瞳でその色は闇そのものであった。

また、容姿も人形の様に整った愛らしい顔で体は村の子供達よりも一回り小さく華奢な感じがした。それよりも、ホロイドが驚いたのはその少女が着ている服（着物）が自分がこれまで見てきた事がない物だった。材質は、よく庶民が着ている綿で織られてはいたが色は深い青（藍色）で見た事のない模様（花火の絵付け）だった。

それを見たホロイドは、この少女は異世界からの渡り人と確信

した。渡り人とは、このアースガルドが誕生した時から時折り異世界から渡ってくる人たちの事をそう呼んでいた。ただ、ここ500年程はその様な事が起きてはいなかった。

「ここは、何処で貴方は誰ですか？。できたら、詳しい事を教えてほしいのですが。」

少女は、鈴を転がす様な愛らしい声でホロイドに話しかけてきた。ホロイドは、その少女の声で我に返り少女にこう話しかけた。

「日も暮れてきたから、わしの小屋で話しをせんか？。お茶を飲みながら、詳しい事を話そうかの。」

「それは、良いですね。その方が、私も落ち着いて貴方に詳しい事が聞けると思います。それに、私自身も冷静になれると思いますから。」

少女は、ホロイドにその様に話しをかえしてきた。その少女は、外見年齢とはつり合わない様な理知的な瞳でホロイドを見上げてきた。その様子に、ホロイドは微かな違和感を感じていた。

「では、行こうかの。小屋は、ここから少し行った所にあるのじゃよ。」

そうホロイドが、少女をうながしながら精霊樹に背を向けて丸太小屋の方へ少女を導いた。しばらくすると、丸太小屋が見えてきた。ホロイドは、そこから少し離れた地面に置いてあった籠を拾い籠の番をしていくれた使い魔のバーニングに声をかけた。その様子を少女は、興味深そうに見つめていた。それを見てホロイドは、少女に話しかけた。

「この梟は、わしの使い魔で名はバーニングじゃ。使い魔は、始めてみるかの。」

「ええ、使い魔は初めてみます。貴方は、魔法使いなのですか？。」

「そうじゃ。だが、ここでは魔術師というかの。」

その様な会話をしながら、ホロイドは少女を丸太小屋に招き入れた。丸太小屋に入ると、ホロイドの肩にとまっていたバーニングは彼の場合である丸太小屋のドアの直ぐ横にある止まり木に飛び移ると羽を休めた。

ホロイドは、丸太小屋の奥にある戸棚の前まで行きその中から二つの無骨な木のカップと茶筒を取り出してテーブルにおいた。そして、暖炉の火の上にかけてある鉄のポットをもってテーブルによりお茶の支度を整えるとドアの前に立っている少女にイスを勧めるとホロイドもイスに座った。

「さて、わしの名はホロイド・コルティリアじゃ。先程ほど、お主に言っただようにしがない魔術師じゃ。」

「私の名前は、ロールドといいます。」

少女がそう名のると、ホロイドは少女をじっと見つめて静かに話しかけてきた。

「ふむ。それは、お主の真の名かの？。お主のような異世界からの来訪者は、ここアースガルドでは渡り人というのじゃ。じゃか

らの、それほど気がまえる必要はない。じゃが、気を付けるにこした事はないが。ここ、500年程渡り人は来てはおらん。」

ホロイドは、少女にそう問いかえしてきた。それを聞いた少女は、少し目を細めるとその深い闇色の瞳でホロイドをじつと見つめながら話しかけてきた。

「さすがですね。私の名前は、草薙翡翠。こちら風に言い直すと、翡翠・草薙といいます。翡翠とおよび下さい。ホロイドさん。」

「わしも、ホロイドと呼んでくれるとありがたいんじゃが。翡翠か、良い名じゃ。翡翠、お主どうやってここアースガルドに来なさった？。詳しい事を、聞かせてくれんか？」

翡翠は、ホロイドに聞かれるままここアースガルドに来た経緯や自分がもう成人していて異世界地球（日本）から来た事、日本では退魔師という仕事をしていた事を話した。ホロイドも、翡翠に聞かれるままここが異世界アースガルドでここアース大陸でガルド王国の王都オスニアから徒歩で半日ほどにあるルプルの森（迷いの森）でその森の奥にいる事や、この辺りの事を話した

それで分かった事は、翡翠が何かの役目がありそれが終わるまでは日本に帰る事ができない事。また、どうするかは翡翠自身が決めてもよい事と、今後どの様にしていけばいいかという事である。その中でも、翡翠はアース大陸の共通語や他の言語の聞き取りと読みは出来る事がわかったが文字が書けない事もわかった。

その為、ホロイドにアース大陸の共通語および他の言語の文字やこの世界での常識・習慣などを教えてもらう事になった。蛇足だが、神様オプシオンとして記憶力のアップ、身体能力はもはやチー

ト。魔力は、ホロイドいわくガルド王国の宮廷魔術師になれるくらいで利用できる魔法は四大魔法（火・水・土・風）、光・闇の魔法の中級程度は使用できるとの事。そして最後に、翡翠自身の22歳の若返り。

私としても、若返り過ぎだと思う。せめて、もう少し上の15歳くらいが良かった。これでは、何かするにしても11歳という肉体年齢の為出来ない事の方がよりすぎる。役目をおしつけるのなら、その事も考えてほしい。

「ホロイド、これから迷惑を掛けると思っけど宜しくお願いします。」

「なんの。わしも、これからの事を考えると楽しみじゃわい。翡翠、宜しくの。」

そう言つと、二人はそれぞれの右手を出してしっかりと握手を交わした。ここに、世界を超えた祖父と孫の誕生である

おまけ

主人公：草薙クサナギ 翡翠ヒスイ 33歳 アースガルドでの名前：
ロールド（ロール）

職業：表、売れない小説家。裏、退魔師 アースガルド：

剣士・魔術師・退魔師

容姿：トリップ前・並、黒髪黒瞳。後・容姿端麗、闇色の黒

髪黒瞳。

武器：日本刀で銘は、水月。退魔師の時は破龍。破龍は、退魔刀の為使いわけていた。

草薙流剣術・体術を習得している。どちらも、達人並み。ただし、トリップ後は、身体能力がチートの為それ以上。

神様オプシヨン：記憶力、身体能力ともにアップ。アース大陸の全言語聞き読みともにクリア。ただし、文字は書けない。

性格：大らか、多少のことでは動じない、少し計算的などころもある。天然。トリップ後、自分の外見が多少は見目が良くなった位にしか思っていない。

式神：十二神将（十二匹いて、日本では鬼と呼ばれ異世界アースガルドにはいない魔物）

ホロイド・コルティリア 90歳

元筆頭宮廷魔術師（20年程前に引退）、今はルプルの森で隠遁生活を送っている。また、高名な医師でもある為周辺の街や村の人達に慕われている。薬草摘みの時に、翡翠を発見保護する。20代の頃に結婚するが、妻とは死別し子供はいない。その為か、翡翠を孫のように可愛がりアースガルドの一般常識・習慣を教える傍ら、一般学問（国語・算数・礼儀作法）の他に自分の魔法・医学・薬草の知識を伝授する。翡翠と一緒に生活するも、4年後に老衰で死亡。

アースガルド用語

精霊樹：その名の通り、精霊が宿る樹で他のどの樹よりも巨大で立派。（日本の神社にある御神木の様な物）

出会いとこれからの事（後書き）

感想・意見お願いします。

森での生活とギルドの登録（前書き）

投稿が、遅くなりました。約四ヶ月ぶりの、投稿となります。

森での生活とギルドの登録

ルプルの森は、今静かに夜が明けようとしている。森の木々の間を、夜明けの月の淡い光から朝の太陽の優しい光が入れ代わるように差し込んできた。その間を、ぬうように森の小鳥達が朝の喜びの歌をさえずりながら飛びかう。そして、そのさえずりを合図に森の動物達が夜の眠りから朝の活動へと動き出す。そうして森がすっかりと目を覚ました頃、ルプルの森の奥に立っている丸太小屋の扉が開きそこから一人の少女が出てきた。少女は、シンプルな木綿のワンピースを着て手には木のバケツを提げいた。その少女は、丸太小屋の扉を静かに閉めると丸太小屋の裏にある井戸に水を汲みに歩き出した。その少女の名は、翡翠である。

翡翠は、井戸から水を汲み上げると丸太小屋に戻り、水甕に水を注ぎ入れた。その横でホロイドが、釜戸の火石を並べ替えていた。火石とは、火の性質を持つ石の事で薪の代わりにアースガルドでは一般的に使用されているものである。その他に、水石や光石などもある。ホロイドが、釜戸で豚肉のベーコンを焼いている間に翡翠は奥の戸棚から二人分の木の皿とカップを取り出してテーブルの上においた。テーブルの上には、パンの入った籠があり木のカップにはお茶が注がれその横にある木のボールには色鮮やかで瑞々しい野菜のサラダが盛られている。

「さて、ベーコンも焼けたようじゃ。翡翠、皿を取ってはくれないかの？」

「はい、どうぞ。ホロイド。」

そういうと翡翠は、ホロイドに皿を渡した。その皿を受け取る

とホロイドは、皿にベーコンを盛り付け一つを翡翠に渡しもう一つは自分の前において椅子に座ると朝食を食べ始めた。二人は、食事をしながら今日の予定を話し合った。

「翡翠は、オスニアのギルドに行つて冒険者の登録をしてくるのじゃない?。」

「はい、そうしようと思います。ただ、王都に行くのはホロイドが買い物をする日にしようかと思っています。」

翡翠は、ホロイドにそう話を返しながらボールに盛られているサラダを皿に取り分けるとホロイドに手渡した。ホロイドは、サラダの盛られた皿を受け取るとしばらく思案してから翡翠に話しかけた。

「そうじゃな。三日後に行くので、その時に一緒に行こうかの。」

「ええ、私もそのほうが楽しみです。」

そう言う二人は、その時にどんな会話をしようかと其々が思つて笑いあつた。ホロイドに見れば、行き成り現れた翡翠は渡り人ではあるがその幼くなつた外見もあり自分が保護すべき対象であると感じている。ホロイドには、20歳の時に結婚した妻がいたが病で亡くしたため子供もない。その為か、翡翠を自分の子供か孫の様に可愛がつている。ホロイドは、翡翠に自分の持つてゐる知識を出来るかぎり伝授しようと考えている。その為、翡翠に教える時は少しかり厳しいものになる。翡翠は、この二年の間アースガルドに馴染むためにホロイドから必死に知識を得た。

ホロイドから見ても、翡翠は今まで教えてきた若者の中で飛びぬけた存在である。ホロイドは、翡翠が若返った事は知ってはいるがそれが22歳も若返りをしたとは知らない。またその事を、翡翠は言い忘れていた。その為、ホロイドは翡翠に対して大きな勘違いをしていた。翡翠には、基となる知識があるという事を。それから、三日程たった初春の朝早くホロイドと翡翠は日用品を買いに王都オスニアへ馬車で向かった。馬と荷台は、前の日にミル村に行き借りた物である。近隣の村では、村ごとに共有の馬車があり当番制で月一に王都へ掻い出しに行く事になっている。今回は、ホロイドの当番でそれに翡翠が付いて行く事になった。

ホロイドが住んでいるルプルの森は、ミル村のすぐ近くにあるためホロイドはミル村の住人として国に戸籍がある。翡翠は、昔のホロイドのコネを使い隣国エシヤンの民でホロイドの養女として国に届けてある。ミル村の住人には、知り合いの子供で二親を亡くした為自分が引き取る事になったと村長を通じてホロイドが説明をしていた。そのおかげで、翡翠はミル村の人達と早くに打ち解ける事が出来た。また、ホロイドでは解らない此方の世界での女性の常識や習慣などをミル村の年嵩の女性達に色々教えてもらった。村の子供たちは、最初は警戒をしていたが年頃の少女達を相手に翡翠が香りの良いポプリや石鹸などの作り方を教えるようになったら何時の間にか仲良くなっていた。その様にして翡翠は、アースガルドで生活をしていく為の知識を蓄えていった。翡翠が、ホロイドと出会い二人が森の中で生活をするようになって二年が過ぎていた。翡翠は、外見年齢が十三歳位になったのでそろそろギルドに登録をしたいと考えていた。その為王都に行く必要があり、ホロイドと話し合った結果今日になったのである。

王都オスニアに着くと翡翠は、ホロイドと一緒にミル村の村人達から頼まれた日用雑貨品や村では手に入らない嗜好品等を買いき

めた。それが終わるとホロイドは、自分が集めた薬草や調合した薬の他に翡翠が作ったポプリのサシュ・香草入りの石鹼等を馴染みの魔法店に納めにいった。蛇足だが、翡翠の作った香草入りの石鹼は王都オスニアの他に主要な都市の裕福な商人や貴族のご令嬢達に密かな人気である。それまで誰も、石鹼に香をつけようとは考えた事がないからである。ホロイドと別れた翡翠は、その足で王都の中心部にあるガレ広場から少し離れた所にある冒険者ギルドへとむかった。ギルドの出入り口の武骨な木の扉を押し開けて、翡翠が中に入るとギルドにいる冒険者やギルドの職員が翡翠を見て驚いた。年の頃は十三歳位で、容姿はまるで闇を具現化したような美少女でこの世界ではあまり見かけた事の無い闇色の黒髪黒眼で髪は肩より少し長いくらいである。また着てる服装は、上は若草色のチュニツクに下は薄いベージュのズボンに皮のブーツとよく王都で見かける格好である。その為、周囲にいる大半の冒険者達は翡翠を見てとてもギルドに用があるようには見えなかったからである。ギルドの受付の職員であるミリアは、少女に話しかけてみた。

「お嬢ちゃん、この冒険者ギルドに何か用があるのかしら。」

すると、その形の良い薄紅色の唇から耳に心地の良い楽の音の様な澄んだ声がミリアの耳に聞こえてきた。

「ギルドに、冒険者として登録にきました。どの様に、手続きをしたらよいですか？」

少女の、

その言葉を聞いてミリアは驚いた。ミリア以外も、その少女の言葉を聞いていた周囲の冒険者達が笑い出した。なぜならそれは、ギルドに冒険者として登録するのは大抵十五歳から十八歳位の腕に覚え

のある者が主で、少女の様に十三歳位の年でギルドに登録をしようとした者がいないからである。ギルドの受付カウンターの周囲にいる冒険者達が笑うなか、奥のカウンターで他の職員に依頼達成後の換金をしていた革鎧の男と黒い鎧の男二人だけが笑いもせず少女を品定めするように見つめていた。

ミリアは、周囲の反応を無視して少女に登録の手続きと冒険者の説明をした。ランクは、最低がF・E・D・C・B・Aで最高がSであること。依頼を請ける時は、ギルドの出入り口横にある看板に依頼用紙が貼ってあるのでその中から自分のランクにあつた物を受付に持ってくる。また、依頼達成後は其々に応じた内容により金額が支払われる事などである。

「では、こちらに名前と職業を書いて下さい。また、ギルドから支給されるギルドカードは無料ですが紛失した等で再発行されると銀貨一枚となります。」

翡翠は、ミリアに言われてカウンターの上にあるわら半紙のような紙に自分の名前と職業を記入した。翡翠は、アースガルドに来た当初名前を名乗る時はそのまま地球にいた時の名前ではなくロールドと名乗るようにしていた。それはホロイドと、相談した結果偽名を使用する事になり翡翠がホロイドに最初に名乗った名前を使用する事になった。何故ならば、渡り人と分かれると厄介な事になるからである。渡り人は、アースガルドにはない知識や技術の他人には持ち得ない力等を持っているからである。ちなみに、ロールドとは翡翠が表の仕事である小説家の時に書いた小説の主人公の名前である。

「ロール様ですね。職業は、魔法剣士でランクはFです。これで、登録は終了しました。」

これにより、翡翠は冒険者としてアースガルドでの一歩を踏み出したのであった。

森での生活とギルドの登録（後書き）

どうでしたか？。また、近いうちに人物紹介と用語辞典を投稿します。その他に、閑話で主人公以外の別視点で短い話を書きたいと思います。

登場人物・アースガルド用語辞典（前書き）

今回は、登場人物のたまかなプロフィールやアースガルドの用語辞典・世界観等を書き出してみました。

登場人物・アースガルド用語辞典

主な登場人物

草薙翡翠：アースガルドでは、ロールド（ロル）と名乗る。アースガルドにトリップをした時に持ち込んだ物は、退魔師の道具一式（水晶の数珠・呪符・筆道具一式等）が収められた布製の鞆。これは、後に魔法で四次元ポケットのような魔法付加を付けて使用する。アースガルドの住人は、地球という所の霊力は使用できない為翡翠の退魔術は防ぐ事ができない。

ホロイド・コルティリア：翡翠の養い親であり、また魔法の師匠でもある。翡翠と、ルプルの森と一緒に暮らし始めてから四年後に老衰で死去する。元ガルド王国筆頭宮廷魔術師。種族は、人族。

ジェイド（2

5）：Sクラスの冒険者で、二つ名は王虎。翡翠と出逢いの時は2

3の時で、翡翠に一目惚れをするが悟られないようにしている。剣は、両手剣を使用しているが翡翠には敵わない。魔法は、初級魔法が扱える。ロイとは、幼馴染みで15の時に冒険者になる。性格は、冷静で寡黙。種族は、虎の獣人族。身長は、195。

ロイイツグス(25)：Sクラスの冒険者で、二つ名は剛雷。翡翠との出会い時は23の時で、ジェイドと同じく翡翠に一目惚れをするが翡翠が育つのをまっている。剣は、大型剣(背中に背負うタイプ)を使用しているが翡翠には敵わない。怪力で、大柄な外見ながら俊敏な動きが出来るが魔法は使えない。性格は、陽気で世話好き。種族は、巨人族。身長は、210。

アースガルド用語

火石：アースガルドで、薪の代わりに一般的に使われている。それは、五個から八個で火力を調整しながら使用する。

水石：水石を、水に浸して置くと少しずつ水が湧き出してくる。水瓶や貯水タンクの大きさに中に入れる石の

数は異なるが、村で使用する水瓶には一個から二個入れる。ただ、二日に一度桶に一杯位の新鮮な水を水瓶等に補充しないと水石から湧き出る水の量が少なくなる。

光石：灯りの代わりになる石。ランタン等に、光石を入れて使用する。明るさは、蛍光灯位の明るさ。日に一度、太陽の当たる場所に二時間から三時間置くと一晩は明るい。

浄化石：携帯用の水袋に、一つ入れて使用する。真黒に濁った泥水でも、約三十分位で飲めるまでに浄化する事ができる。

お金：アースガルドでは、銅貨・晶貨・銀貨・金貨・白金貨がある。銅貨百枚で、晶貨一枚。晶貨百枚で、銀貨一枚。銀貨十枚で、金貨一枚。金貨十枚で、白金貨一枚。金額は、日本円に換算すると銅貨一枚十円・晶貨一枚千円・銀貨一枚十万円・金貨一枚百万円・白金貨一枚一千万円。白金貨は、額が大きく貴族や豪商くらいしか使用しない。物価は、銀貨一枚あれば四人家族が余裕で暮らせる。また、宿は晶貨一枚あれば標準で十日は二食付きで泊まれる。

冒険者ギルド：主要な街には、一つはあり大きな村には、ギルドの支店がある。請負う依頼は、手紙の配達から魔物の討伐までとさまざまである。Ｂランクからは、二つ名を名乗る事ができる。また、指名される事もある。その他に、お金を預ける等の銀行の役割を果た

している。

ギルドカード：

身分証明・銀行カード・パスポートの役割をする。ギルドに、置いてある水晶玉に翳すとカードの内容を読み取る事ができる（年齢・職業・ランクなど）。カードを見せる事で、防具・武器・宿は料金が二割から三割安くなる。ただし、ランクにもよる。

種族：アースガルド

では、地球で想像上といわれている生物が存在している。巨人族・怪力で大柄な身体を持ち身体能力は人の三倍から五倍ある。外見は、人とあまり変わらない。二百から二百五十の身長で寿命は人と同じ百前後。獣人族・虎や狼等様々なタイプがいる。外見は、人の姿に其々の獣の耳と尾を付けた感じで身体能力は人の約三倍はある。百八十から二百の身長で、寿命は百前後。エルフ族・見目麗しい容貌に尖った耳、均整のとれた身体で魔法や芸術面に優れ身体能力は人の約二倍。百八十前後の身長で、不老不死。

アースガルド：三つの大きな大陸と、その周囲を大小様々な島に囲まれた世界。

アース大陸：五つの王国と、二つの小国からなる大陸でアースガルドで一番大きい大陸である。

ガ

ルド王国：王制で、アース大陸一の軍事力と財力を有している。今の王は、第三十二代アウグスト・デュ・ガルド（四十五）。彼には、二人の弟と一人息子に三人の娘がいる。宗教は、多神教で主に

太陽神ザインを祭っている。

二つ名：

通り名の事。冒険者は、Bランクから名乗る事ができる。例え・剛雷のロイ。

姓（名字）：アースガルドでは、一般的に民（職人・商人・農民等）には姓（名字）が無い。あるのは、王族や貴族・村長等一部の特権階級だけである。その為、Bランクからの冒険者は二つ名を名乗る事ができる。

登場人物・アースガルド用語辞典（後書き）

この他にも、話の中で増えたら随時書き出していきたいと思います。また、登場人物の名前で何か候補がありましたら教えてください。その中から、採用させて頂きたいと思います。

閑話 自分の身に起きた事（ジェイド視点）（前書き）

今回は、ジェイドの視点で閑話を書いてみました。彼の心の内の動きが解れば良いかなと思います。

閑話 自分の身に起きた事（ジェイド視点）

初めて彼女を見た時に、俺自身何が起こったか理解できなかった。それほど、俺にとっては衝撃的だった。多分、その時俺の隣にいたロイ（ロイイックス）も同じだったと思う。いや、そうだ。俺とロイは幼馴染で、ガルド王国の辺境の村ナセで十五になるまで一緒に過ごし村を飛び出してから冒険者として二十三になる今でも一緒に過ごしてきた。

偶々其

の日俺達は、ガルド王国の王都オスニアに魔物討伐の依頼達成の換金に冒険者ギルドに来ていた。ギルドの受付カウンターで、顔馴染みのミーシャに討伐対象のレッドドラゴン（最下層の火吐き竜・それでも魔物ランクはA）の鱗と牙を鑑定して貰い他に依頼達成の換金をしていた。その依頼は、ある貴族からで自分の領地である村から王都へ続く街道にレッドドラゴンが居座っている為王家に税が収める事が出来ないから討伐をしてくれとの事。レッドドラゴン一体に付き金貨一枚、二体いるので金貨二枚と討伐後レッドドラゴンの鱗と牙は俺達が好きにして良いとの事。ドラゴンの鱗と牙は、良い金になる。鱗が、一枚に付き銀貨一枚牙は二本で銀貨五枚。今回は、鱗が十二枚で牙が四本で合計金貨四枚に銀貨二枚。これで暫くは、依頼を請けなくてもすむが武器や防具に金が掛かるのでまた少し遊んだら依頼を請けようとロイと話しをしていた時だった。

俺は、その時の事を一生忘れる事はできないと感じた。後になって考えてみれば赤面ものだ。それは、唐突だった。

その時、ギルドの重い木の扉が開いた。そこから、入って来たのは人族の少女で年の頃は十三位の華奢で小柄なまるで闇を人の姿に具現化した様な美少女で髪と瞳の色は闇色だった。それが、俺達とロル（ロールド）の出会いの瞬間だった。少女は、ギルドの扉を開けると受付カウンターにいるミリアに話しかけた。

「ギルドに、冒険者として登録に来ました。どの様に、手続きをしたらよいですか？」

その少女の、形の良い唇から耳に心地良い声が紡がれた。それを聞いて、カウンターの周囲にいた他の冒険者達は笑い出した。少女の、実力に気が付いたのは俺達とカウンターの反対側にいたギルドの教官役も兼ねているSランクの怒豪のギルバート（ギル）の他数名のB・Aランクの冒険者だけである。なぜ、少女の実力が解ったかというとギルドの建物の内側の扉の前数枚の板が軋みやすい様に緩く嵌めてあるからである。それを、少女は音を立てる事もなく板の上を歩いてカウンターの前まで来た。それを出来るのが、剣術の腕が余程のレベルに達している者だけである。それを出来た少女は、それだけの腕があるという事になる。だから、カウンターの周囲にいる大半の冒険者達が笑っているなかある程度のランクの冒険者は少女を冷静に観察していた。少女が、ギルドの職員であるミリアにギルドの決まりや手続きの事を説明されそれが終わるのを静かに見つめていた。それが終わるのを待って、俺は少女に声をかけた。

「俺は、ジエイド。Sラン
クで、二つ名は王虎。あんたの名前は、何ていうんだ？」

「唐突ですね。まあ、いいわ。私の名前は、ロールド。ロールと呼
んで下さい。年は、十三になります。」

それが、ロールと俺達の出会いでもあ
り又それが、ロイに言わせれば俺に来た遅い春になる。ただ、その
時ロールが教えてくれた年齢を聞いて俺は暫くの間苦悩する事になっ
たがそれもまた今では良い思い出話になる事になる。

閑話 自分の身に起きた事（ジェイド視点）（後書き）

前の投稿から、それ程空けずに投稿できて良かったと思います。
また、何か意見・感想があればお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7515l/>

異世界の退魔師

2010年11月13日02時23分発行